

〔萬寶鄙事記占天氣〕雨 五更に雨ふれば明る日必晴、五更とは夜るの七ツ時、曉前なり、くれの雨ははれがたし、久雨の後くれがたに雨止みて、明らかに晴るはかならず又雨、雨と雪とまじるは晴がたし、快き雨快く晴老子曰、俄雨は日をおえず、雨水に泡あるは、はれやすからず、天一天上の甲午の日雨ふれば久しくはれず、天一神天より下、かのえいぬの日もおなじ、久雨くもりて晴ず、午時の前に至りて少やむは、午時の後大雨、午の正時に少やむはよし、久雨くらはよし、久雨に天忽明かになるは、必ず又雨ふる、雨中に日てるは、天氣よからず、又雨止て後軒のあまだり未やまざるに日照るは、又雨となる、春甲子の日雨ふれば赤地千里、いふ心は、日でもり也、一説赤地は尺地也、雨へだて、尺地も千里のごとし、夏の甲子に雨ふれば船をさ、へて市に入る、云意は大水出る、秋の甲子の雨は、いねのかしら耳を生ず、冬の甲子の雨は、牛羊こゝえ死す、又一説に、春甲子に雨ふれば船に乗て市に入、夏甲子にふれば赤地千里、秋甲子にふれば、いねのかしら耳を生ず、冬甲子雨ふれば、雪とふ事千里と、二説同じからず、いづれの説よきにや、えらす、丁巳の日雨ふれば四十五日日を見ず、略、中 春あた、かなるべきに、寒きは雨おほし、夏さむきは水出、夏にはかにあつきは雨ふる、略、中 甲午の句中かはける土なし、いふ心は雨まげし、朔日晴れば、その月のうちは晴おほし、朔日雨ふれば、月の内くもりがちに雨ふる、朔日の前より雨つゞきたるは、かろし、毎月初三日晴れば、久しくはる、十五日晴れば、久しく雨ふらず、三日月の下に黒雲ありて、よこざるれば、明日雨ふる、晦日に雨なければ、來月のはじめかならず、風雨あり、略、中 久雨ふれば、かならず其後ひさしく日てる、春甲子大雨ふれば、夏大旱す、夏甲子に雨ふれば、又秋旱す、久雨久晴は、きのえの日より變ず、久晴は、戌の日に雨ふる、久雨は、かのえの日はる、久雨晴ざるは、丙丁に晴る、久雨ふらざるは、戊巳にふる、八專に入たる明日は、多くは雨ふる、俗に入專の通ふりと云、略、中 海上のおきの方鳴るは、必北風ふく、おき鳴て天